



TITLE:

中井正一の戦後活動における「文化」の転形をめぐって: 広島における文化運動の思想を中心に(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号)

AUTHOR(S):

吉田, 正純

CITATION:

吉田, 正純. 中井正一の戦後活動における「文化」の転形をめぐって: 広島における文化運動の思想を中心に(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2005, 4: 77-89

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43857>

RIGHT:

中井正一の戦後活動における「文化」の転形をめぐって

— 広島における文化運動の思想を中心に —

吉 田 正 純

On the transformation in Masakazu Nakai's concept of 'culture':
And his cultural movement in Hiroshima, 1945-1947

Masazumi YOSHIDA

0) 目 的

この小論の目的は戦後期広島での中井正一の文化運動を「知識人啓蒙」一般ではなく、反ファシズム運動の敗北を踏まえた独特な大衆参加思考の探求として再構成することにある。これを「指導」よりは労働農民運動における自己教育の媒介として素描した上で、同時代の文化活動との対質でその「文化」概念の批判的把握と逢着した内的限界を提起する。

ここでは1945年敗戦前後における中井の「戦争肯定」と帰郷・尾道図書館での再起の時期から、1947年後半の知事選・運動停滞・東京移転と離脱までの約三年間を対象とする。ここでは労働文化協会等の労農運動参加者側からの運動論的「文化」把握と、この活動を考察した中井の諸テキストにおける「文化」の思想史的文脈との対照に重点をおきたい。

この分野では『思想の科学』グループ以来の集団・コミュニケーション論としての関心や、教育学における佐藤（1992）・山崎（2002）等の実証的な理念と実態の研究が蓄積されてきた。社会教育研究でも笹川（1984）や北田（1986）らが社会教育行政成立以前の実践として、中井の「文化のたたかい」としての社会教育思想の独特な立場を掘り起こしてきた。

ただ思想史では中井＝自由主義モダニストの「知識人の啓蒙性」（豊沢1985）の図式が先行し、予め他の啓蒙運動と同断の自発性軽視・組織性欠如という限界が想定されてきた。近年「中井美学」でも前提となったこの静態的な「文化啓蒙家」像の毀誉褒貶を一旦離れ、1930年代に途絶した文化運動の再出発にむけて苦闘する実践家中井を素描してみたい¹⁾。

1) 中井正一の戦後活動の出発点 — 「悔恨文化人」との差異

— 《抵抗と敗北》の陰翳

中井正一の「戦争協力」記事については従来から転向・「私的」協力と抵抗・蓄積が指摘され（鶴見1981）、近年ではその戦後への思想的連続性も指摘されてきた（鈴木2001等）。特に敗戦直前の地方紙コラム「橋頭堡」の無残な戦争肯定に流用された抵抗の「文体」は、「主体的な」執筆意志と戦後の反省的言及の不在からも決して看過できる内容ではない。そのうえでここでは共通する「善意」の汲取りを留保し（ガリレイ的）「虚言」による生存戦略と考え、速

捕以降七年間の沈黙強要・生活苦を経た自覚的な屈服・敗北を強調したい。つまり個人的倫理観を離れて運動的には「同志」・友人との接触も禁じられ執筆も禁止され、『資治通鑑』の儒者にもなれない無力を噛み締めての消極的生存の選択という解釈である。

これは「蹲る敗北者像」の逸話（中井浩1981）や「何としても生き残ろう」という証言（久野1981）に加え、かの「委員会の論理」等で論及した政治的「虚言」とも重なるとも取れる。そして何より「橋頭堡」末期と戦後「雪」に共通する「人間の愚劣」への驚嘆というモチーフは、「知識人啓蒙」と「大衆参加」の間で佇む屈折した折り返し点を示している。だがこれは自らを含む大衆を責任なき被害者ではなく時流に屈服した敗北者として凝視し、民衆の侵略参加と知識人運動の無力の原因を痛苦に総括するという戦後の原点を形成する。他の戦前反戦活動家と比しても「獄中非転向組」のような真理を保持した勝利者ではなく、また転向から総力戦体制への協力の途を辿った多くの知識人の懺悔とも異なる地点に立った。

これに対して「悔恨共同体」の知識人はむしろ積極的な翼賛体制への加担をした屈辱感から、悪しき為政者への告発を発条にした「民主国家」への再転向に結集した（小熊2002）。むしろそれは「手のひらを返した」戦後体制への便乗ばかりではなく、むしろ真摯な自己の「弱さ」を掘り下げて新たな「戦後精神」の模索として研究・言論に再出発した。ただ中井の場合「文化国家の再建」よりは「国家の没落」と「受苦」（藤田2003）に沈潜し、挙げて戦後改革を代表し指導する「文化人」として登場することへの躊躇が見てとれる。たとえば最も多くルーツも含め共通点をもつ庶民大学三島教室等とも比較しても、戦後の「解放」の可能性よりは廃墟の壊滅状況と知識人との距離感の自覚の点で差異がみられる。

かつての「同志」久野・武谷らとも共有する戦後国家への醒めた感覚と「政治」との距離感、戦前期に体制内合理主義ではなく民衆自発性の探求（と敗北）の経験に原点を持つ。『世界文化』・『土曜日』自体が民衆運動の波に当初から「遅れてきた」世代であり、「満州事変」以降の大衆文化とファシズム体制への「自発的参加」をこそ問題にしてきた。ここに『土曜日』同人が翼賛体制推進に積極的に加担せずにやり過ごし、戦後空虚さを感じつつ早期に「主体性論争」・京都人文学園・『夕刊京都』などの活動を開始した根拠もある。その意味でこれは「戦後社会教育」の出発点を占領政策と「民主国家」ばかりでなく、「戦後文化啓蒙」からも遡り1930年代以降の翼賛と抵抗から再考する問題系をも提起する²⁾。

—「戦後」再出発の意味

「聴衆0の講演会」に記された敗戦直後の「暗黒期」は単に「知識人の限界」ではなく、語るべき言葉を持たない自身と青年たちの原初的な「明るさ」の対比を回想したといえる。中井が講座型式に先立つ「希望音楽会」や座談会・「花の祭」等の企画を通じた出会いは、復員兵や「女子青年会」の混沌とした欲求に圧倒される経験でもあったと推測できる。他方で実践活動への「復帰」の動機は内向きの反省や知識人・政治運動への配慮よりも、体制内外で抵抗しつつ敗戦前後に獄死した友人・戸坂潤と三木清の遺志が影響している。それは反体制運動のためにアカデミズムから離れて批評活動に飛び出しながら、孤立した抵抗と「新体制」参画に分岐した末に「戦後」を迎えなかった両者の実践への賭けである。

この二人が対峙し続けた西田哲学の観照性や田邊元の他者なき「懺悔道」を越えるための、「意識がその息を吞んでしまう」実践への没入はまさに「断崖」からの飛躍を導いた。それは戦後の再出発にあっても「思惟体系」の中で「意識反省の中に起伏」するのでなしに、大衆の現実の矛盾・対立に身を投じて「誤りを踏み越える」ことを意味したのである。とはいえ保護観察下の空白期間の挫折感と都市市民層と異なる「農村」の現実の厚さに加え、根深く染み付いた「指導者意識」は最後までその桎梏になり続けたのも事実である。自分の喜びと思いが溢れる「熱演」から聴衆が次々離れる「深刻型のセンチ性」から脱却するには、技術的な改良ではなく経験に届き「腹の底まで」響く言葉を探る作業を要した。

こうした「文化の大黒柱」としての「意識革命の心根」への接近は通俗的大衆迎合と異なり、民衆が抑圧構造の内面化を自力で探り当てる「腸を出して洗う」痛烈さを伴った。聴衆にとって国家や軍部に「騙された」被害者ではなく侵略の加害者ともなった事実を、日常の村＝家社会の経験・感情を意識化し「思想」と対象化する作業は未経験であった。同時にその厳しい自己切開は知識人の「派閥性」や権威・羨望に由来する、「啓蒙文化人」の「わからなければ、ついてこい」式の指導者意識にも向けられたことに注意したい。既述の「人間の愚劣」は論理・合理性がその「正しさ」にも関わらず通用しない、意識以前に身体化され習慣化した「知識人／大衆」を貫く体制順応の馴致という現実を意味した。

加えて知識人の生活・日常への関心や「科学的」近代化・合理化による「民衆」への接近は、1930年代後半以降の「総力戦」下での「教育科学」を含む新体制運動と明確に連続する。「悔恨共同体」の知識人による大衆回帰と社会改造への参画の原点は実はこうした「転向」にあり、「民衆（国民）の現実」に溶解した政策科学的合理化の原型は既に共有されていた。1950年代以降これらのアカデミズムや政策領域での批判的言論界復帰に見られるように、「国民／国家」を政策・制度を通じ改革する「指導者」像は決定的には揺るがなかった。「啓蒙知識人」の多くはもちろん意識的に過去を雪ぎ「大衆に学ぶ」経験をもったが、占領政策や新国家・憲法の理念の解釈普及に沿った以上はその転換と運命を共にする必然もあった。対して中井は平和や民主主義さえ所与の「僥倖」とする民衆とその欲求に応える知識人の構図を越えて、侵略とファシズムを共支えたこの心性をこそ問題化した点に最大の特徴がある³⁾。

2) 戦後啓蒙と「文化」との距離——「文化のたたかい」をめぐって

——「文化運動」における位置

戦後初期の文化活動の興隆は決して知識人による組織化だけではなく、雑多な教養・娯楽そして「“世界”を把握するための指針」（北河2000）への渴望が原動力になった。実際そこで提供された内容は1930年代以前の大衆文化と占領軍文化の混合物であったにせよ、「自己の境遇が激変する経験」（赤澤1995）を説明する思想への欲求が澎湃としていた。広島県でも1946年だけで100近い「文化団体」が各地で結成され（別表）、その性格も趣味娯楽サークルから民主運動、官製団体から労組中心までの雑多な自発性を糾合した。特に備後地方では三原の労働運動を拠点にその活動家が農民・文化運動をいち早く広域で展開し、地域有力者や文化人・図書館運動とも緩やかに連携する機運が生じていた（山崎2003）。

これらは戦後の現実を意味付けるという「下からの」渴望に支えられて成長したが、組織的には戦時下からの翼賛文化運動や青年団さらに産報生産管理運動などを引き継いでいた。無論方向付けは180度転換し民主化された体制の元で開始されたにせよ、倫理的な叱責以上の「戦争責任」の掘り下げは封殺され文化や宣伝・娯楽を通じた抑圧は看過され続けた。この高揚は政治的空白に発生した大衆の原初的な欲求と知識人の悔恨の間に生じたため、「文化」の概念は（階級や民族等の葛藤よりも）それ自体肯定的なものと歓迎された。こうした「文化国家」のイメージは主として復帰した自由主義者によって唱導されたが、GHQ「解放軍規定」で民主化に協力した共産党・文連系の運動でも概ね共有されていた。

これに対し中井の場合の「文化」は知識・教養それ自体の普及・享受の代行ではなく、大衆自身が「創造せんとしつつあるもの」を闘いとるか否かの「賭け」を意味していた。それは戦前既に所謂「高級文化」の普及ではなく映画・演劇・大衆小説等の両義性に着目し、サークル組織化を通じた文化の集団的消費・表現固有の闘いを試みた経験と連続する。同時にプロレタリア文化運動などの狭い政治プロパガンダ的な同一化の失敗に対して、参加者の相互討議や多元性を尊重しつつ新たな「集団的主体」を構想する可能性を提示した。戦後農村活動ではこの「否定の媒介」となる文化・思想の欠如という決定的違いに面したが、あくまで足掛かりを農民自身の生活経験の批判的意識化に比重を置いた。「カント講座」等で繰返された内容は封建遺制批判や民主文化国家の諸価値だけでなく、共同体の相互抑圧と個人主義に拘束され侵略戦争に加担した民衆の自己理解（その批判）だったのである。

足掛かりは確かに「封建意識脱落」の「文化啓蒙」による「自己の尊厳の回復」だったが、同時に資本制の「我利我利根性」を越えた集団・組織の組み替えも意識されていた。実際に中井が青年達や講師陣と共に組織した実践は表面的な構成では他と大差はないが、その自主的運営に止まらず自らを越えていく契機を「文化」に託した点で際立っている。そこでの「文化」イメージは無条件な近代化論的知識普及による啓蒙・解放とは異なり、「社会的無知」を超えるための「人間の愚劣」との不断の困難な闘い自体の価値である。この立論は『土曜日』等の大衆文化批評と大衆参加の「共考」（池田1988）実験の蓄積と、その（言外の）「政治批判の代用品ではない」文化運動への思いに基礎付けられると考える⁴⁾。

— 戦後（社会）教育言説との関係

座談会「平和のための教育」における中井・新村猛と清水幾太郎・宮原誠一らの討論では、こうした「文化」理解の相違が「民主的」教育の位置付けの微妙なズレを生じている。この「冷戦」前夜の1949年に吉野源三郎を司会に現場教師を交えて開かれた座談会では、後者の国策協力から国民教育論への移行との対照が「平和教育」論に表れて興味深い。例えば清水が「平和の観念」・宮原が「教師の平和教育」能力の内容を提示したのに対し、新村が大衆は「啓蒙だけで戦争を否定しない」と述べ中井もその「サロン化」を危惧する。また一方で清水・宮原が「教育勅語」失効後の「空白」を埋める「平和の理想」を提案し、他方で新村らは平和を「わからせる」ではなく「文化的活動においてそれに到達」と強調する。さらに中井は「彼ら自身に考えさせ」「いろいろな見方」＝法則性を提示することを重視し、平和のために

「暴力的に解決する」戦争とたたかう「広い意味の教育」の回り道を示す。こうした総括は中井も新村（京都人文学園）も文化運動での「教育」原体験とともに、戦前『土曜日』以来の練られた大衆参加・人民戦線型の民衆教育イメージが見てとれる。清水らは共感しながらも「合理的精神」を「甚だ陰阻な道」として日常・感性を強調するが、中井は民衆の戦争意識の掘下げと知識人の文化運動への理論責任にあくまでこだわる。また（教育）思想の典拠として宮原・清水がデューイなど合衆国の民主教育論をモデルとし、中井が「土の上で」通用する理論の堅牢化・「簡単化」を主張する点でも好対照となる。

中井自身も都市市民層・知識層と異なる根強い「農村の思想」の「危機としての無媒介」、善良と残忍の「矛盾的性格」と市民的感覚が欠如した「否定的精神」の蔓延に直面した。特に中国侵略の尖兵たる「四十一連隊」を生んだ備後地方農民の「善良と残虐」に触れて、「侵略根性」が村社会の「抜け駆け」と家社会の「忍従の美」に根を張る事実を凝視する。だが歴史を支える「アトラス」・文化を護る「ヘラクレス」たる「覚醒への闘い」を信じる点で、インテリ的「農民思想欠如不在」論への疑問（佐藤1992）は妥当であろう。すなわちこの論理性なき「反応」ともいふべき不合理な精神性＝「根性」を自力で越えていく、踏み台＝弁証法的媒介として自覚化し「農村の思想」へ凝集する潜在性を信じたのである。その上で文化運動における教育は農民意識の全肯定ではなく「意識革命」である以上、知識人の「啓蒙的」役割は「睡れる知恵」を成熟させる「負い目」と課題と再定位される。中井自身にとっても実践の定着後でさえ「いかに自分が何も知らないか」を検証され、青年たちの疑問に答えるのは「容易ならざる自分の鍛錬」であり続けた所以である。後に「文化のたたかい」では「利潤対象としての大衆」の「間に合わせの芸術」に議論を広げ、社会の変化に「適応」するためだけの「知識の普及」は社会的無知しか生まないと喝破する。

そこでの社会教育はこうした中途半端な文化の「互いの汚濁」の前に佇んでいるが、同時にこの危機を感知する「繊細な知恵」を探り伝える「文化のたたかい」であるとされる。この批判的感覚と共に「ほんとうに闘うべき世界」をイメージする芸術・文化を伝え、時空を越えて喜怒哀楽を共有していく困難な役割を「社会教育のほんとうの意味」とする³⁾。

3) 戦後期広島文化運動の展開と「文化」活動——「知識人」の再定義

——戦後諸運動との関連

これらの文化運動は中井正一が記述した枠組でまず理解・評価される傾向があったが、山代巴や中川秋一など農民労働運動家や青年たちの当事者の意味付けは自ずと異なる。ここでこの文化運動を知識人（中井）の働きかけに先行する大衆の自己組織化として理解し、その労農諸運動やサークル活動の自発性・自律性を分析視野に入れる意図を強調したい。1946年代前半には既に各地の文化運動団体・サークルが自発的な活動を開始しており、中井は尾道図書館での実績はあれ「地方文化人」講師の一人として当初招かれたに過ぎない。後に労働文化協会会長（1946.11-）として労働学校や夏期労働大学の組織化に乗り出すが、様々な文化運動は参加者の階層・目的・背景など極めて雑多な性格を有していた。

備後地方（三原・尾道・府中等）は戦後早期から労働運動再組織の先駆的拠点を形成し、北

部農村でも農民連盟が自立した活動を開始して多くの活動家が入り込み活躍していた。労働組合法公布後再建された労働組合では産報団体を改組して職場内文化サークルを組織し、山代や小宮山富恵らの農民組合運動も各地団体と連携して講演・文化活動を展開した。文化活動でもこれらを背景に文化連盟・文化協会が各地で早くに結成され、特に府中文化協会は「文化再建の基盤を一般民衆の自主的活動」にと謳う綱領を敗戦直後に起草している。こうした「進歩的」・総合的文化団体だけでなく教養・趣味的なサークルも無数に生まれ、翼賛文化団体以来の有力者・青年団組織などを継承しつつ「民主化」を消化していった。

これを担った山代巴（三原農民連盟）・中川秋一（広島県労協）ら戦前以来の活動家、図書館活動の村上菊一郎・藤原覚一（三原図書館）や無数の青年たちが中井と出会っていく。このような「中心的」活動家の証言のみで参加者すべての意識を押し量ることは不可能だが、この人々の口と手を通じて村や職場に伝えられヨコの繋がりも成立した点に特徴がある。いずれの参加者の回想にも共通するのは中井の哲学や美学の「講義」内容よりは、「宇治川の先陣」や生活の事例をあげた「自分の中の封建精神」の洗出しの強烈な経験だった。この人々は当初「中井先生」を当初尾道図書館在住の「進歩的知識人」講師として招いたが、「期待に反して」共通して譬えや挿話を多用した自己の内部を抉る熱弁に魅了された。

かの有名な「あきらめ・見てくれ・抜けがけ根性」の克服を説く演説はこの人々にとって、自分だけでなく大衆に「自分の力でジャンプする」ため伝える思想を言語化する糧だった。中井自身がその場で感動・理解するより村に覚えて帰って繰り返すことが可能な概念と、「根性をでんぐりがえす」ような「回心」の契機を参加者にもたらす意図をもった。農民・労働者の中には何度も繰り返し同じ「中井の話」を聴きに講義を訪れる者も多く、その度に自分の経験を振り返り村や家の隣人に伝える言葉を引き出していったのである。そして中井の主観的意図とは離れてこれらの人々の口を通して無数の大衆に伝えられ、「文化」内容より繰り返し日常生活と相互関係を振り返り意識化し語る土台と把握された。そこには大衆の「文化」への渴望や自発性に応えるだけではない目的意識的な「啓蒙」の契機が、経験と「知恵」を引き出し言語化する緊張関係の中で育まれた稀有な例といえる⁶⁾。

— 理論的蓄積の活用と深化

一方で中井の思想もこの大衆・活動家との接触によって何度も「誤謬」と発見を重ね、その方法も希釈した通俗化ではなく反芻・伝達を目的に「標準化された言語」を目指した。テーマ数限定・カタカナ用語抑制・具体例多用など一見形式的な注意も知識の普及よりも、大衆の実践における試練と運用（伝達・記憶）に耐える「文化科学の理論」を目的とした。例えば「見てくれ・ぬけがけ」も単に農民向けの封建残滓脱却の段階的シェーマではなく、運動家・知識人を含め日常経験に投げ返し異化する「簡単化・堅牢化」の方法とされた。それは目標を提示する抽象的「スローガン」や手段的な「意識改革」図式とは対極にある、狭義の「教育者」のみでないメディア・文化運動全体の「理論化」の責任とされている。

ただ後に主観的意図を越えて「封建遺制」克服の面のみが強調されたと振り返るように、「二段階」式に「近代的個人」や「利潤機構」の問題性の意識化はこの実践では後景に退く。

「ぬけがけ根性」等も排他的な封建意識だけでなく個人間競争や消費志向などを包含していたが、実践家を含め受け手にとっては「近代化」・民主化を阻む意識そのものを意味した。とはいえそれは戦前期の近代市民社会を越える集団的実践の思考の後退や適用ではなく、合理性の拡大普及では打破できない「現実」と闘うための反省と思想展開を要した。

生涯関わったカント哲学はその意味で反封建的近代的な啓蒙主体（観測的主観）と同時に、それを越えて（フィヒテ的国民形成と異なる）多元的な実践と社会性に向かう原点だった。この時期のカントの蒙を啓く近代的な合理主義と「自我の尊厳」への意識的な回帰と別に、中井は第三批判（美学・判断力）の芸術創造や感情・文化論に関心を持っていた。そこから既に1930年代を通じて映画・演劇・音楽など大衆文化の消費生産を担う市民に、新たな社会集団と技術・コミュニケーションを通じた批判的主体の可能性を探っていた。戦後も自己を客観化し反省する「魂の広間」をもたず矛盾を共存させる「農民」に、無媒介に指針を与えるのではなく法則性・合理性・秩序の存在を示す発想に到ったと考えられる。

また背景にある弁証法理解は「ワルツのような」公式的・目的論的な進行でなく、大衆が「歴史の線」を「自分のものとして生きているか」を誤りから検出する独特な論理だった。同時にその担い手は個人的自我の内面や（西田哲学的）「無と形式の渦流」の不安を脱し、「集団の存在様相における位置」を歴史的に形成する集団的主体の創出として想定された。これらは『世界文化』前後の様々な京都における反ファシズム文化・批評運動と理論の、広島を含め各分野で戦後の文化運動を担う仲間との共同作業の蓄積に立っていた。京都人文学園や『夕刊京都』に加え新村猛・辻部政太郎・久野収など旧同人が各地を行き来したのは、講師の交換だけでなくその経験を共有し戦前の蓄積を検証する意味もあった。中井には構想段階に終わるが旧同人の真下信一や武谷三男が同時期に「主体性」の考察を進めたように、延長線には相互対話を媒介に共同の動的な「論理」を積み上げる集団論が予期される⁷⁾。

4) 「戦後文化運動の限界・終焉」論の再考 — 途絶した「啓蒙」の回路

— 「時期区分」と評価

中井が実践の後に（「農閑期の文化運動」等で）定式化した「時期区分」（年表参照）は、単純な回想ではなくこれら文化運動の教訓を「標準化」して伝達・共有する意図があった。すなわち客観的には広島でも「暗黒期」から文化サークルが自然発生的に活動開始しており、区分は知識人の関与の総体を事後的に評価し「停頓期」を打破する意図で示されたと考える。当時既に言われた「逆コース」以後の「政治の時代」による「啓蒙の終焉」の図式は、例外的に「知識人」が民衆の教育に徒手空拳で試みた意味を清算する傾向があった。その意味では当時既に「知識人啓蒙の限界」とともに「文化主義偏向」が云われる中で、狭義の「政治」に従属して「下からの」意識改革を閑却する傾向への抵抗も含意される。

第一期の「暗黒期」は既述の通り運動不在よりは大衆の無方向な文化への渴望に対し、知識人が「文化国家」の代理ではない自己を抉り出し語りかける言葉を探る困難を意味した。これは文化運動の側からは空白よりはむしろ崩壊混沌の明るさと可能性の時期であり、翼賛文化・産報運動から転化した組織・エネルギーを「民主主義」に振向ける転換期だった。だが「疎開

知識人」の多くが戦前期の教養主義・「指導者」意識と方法を持ち込んだまま、短期的高揚期の後には大衆の飽き・反発・「無理解」との齟齬の前に挫折していった。この「暗黒期」に中井を含む知識人を突き動かした戦時協力や敗北への慙愧の念は、自己の思想的・内面的再建に注がれたが「遅れた」民衆の無定形な欲求と溝を抱えていた。

次の「覚醒期」描写も方法が確立し労働文化協会の組織化の道筋が見えた成果よりも、「啓蒙知識人」が依然として無自覚に知識普及と指導者意識に自己限定する危険性を示した。実際この時期労働・農民運動からの知識人・文化活動に期待する熱意は最高潮に達したが、中井が招請した講師たちでも大半は講義・学問型の啓蒙に終わり既に失望が広がっていた。聴講者への人気が高いのは中井の講義で他の社会・政治的テーマが低調だったのは、この段階で参加者が求めたのは既に知識一般ではなく意識変革に関わっていたことを示す。また端緒的であれ自律的な「文化運動」の展開として劇団活動や雑誌発行などを開始し、戦前期の学問的蓄積では対応できない労働者農民層の現実的課題も噴出してきた。それゆえ労文協も徐々に労働学校や夏期大学で旧『世界文化』同人の大衆文化批評を導入し、『労文タイムス』や自立劇団など表現活動を通じた「下からの」組織化も試行された。特に夏期大学は辻部・富岡・武谷・新村などさながら『土曜日』期のメンバー再演の様相を呈し、内容的にも啓蒙一般からより実践的な運動・組織論や大衆文化論に踏み込んでいった。

最後の「停頓期」総括は額面通り「地域ボス」や選挙の外的要因で後退した事実よりも、結局は占領政策下の「文化国家」幻想と随伴した指導者意識の回帰への幻滅が読み取れる。ただ通常言われる「上からの」啓蒙活動の限界という評価は希少な知識人の試みの否定だけでなく、大衆（運動）内部において変革すべき課題を放置した「理想化」に帰結しうる。そうした「総括」は結局「高揚期」にあって政治運動や状況の宣伝・解釈に従事するのみで、後退局面には保守的な大勢に順応する文化運動しか導かないことへの批判が読み取れる。「逆コース」下の政治運動の後退という停滞の説明は文化運動の自律性の放棄である以上、その咎は客観状況ではなく知識人の無責任や運動分裂こそが負うものとされたのである。ここには中井の東京移転後の国会図書館副館長期活動からの事後的意味付けを含むといえ、「知識人啓蒙」全般の否定とは一線を画した痛切な内部批判として貴重であるだろう。

—「プレ社会教育」観を越えて

「知識人啓蒙」が国家体制の整備に伴い必要性を失い吸収・終焉を迎えたのは事実だが、GHQに依存する「お祭り騒ぎ」（鶴見1963）に終わった要因は「文化運動」側に内在した。「知識人啓蒙の限界」論は一見すると大衆の自発的な学習要求や参画を賞賛するが、むしろ制度確立以前に活性化した自己教育運動が崩壊に到った要因を探るものにはなりえない。1948年には占領政策の転換・保守政治の復活・労農運動の分裂を背景に文化運動は後退し、参加者が拡散しムラ社会に再吸収された後に公民館・青年団が前面化する謂いである。青年・大衆がこの転変に再び絶望と無力を感じ「焼け落ちた」のを目前に中井は、文化的前衛の否定ではなくむしろその責任放棄を告発し啓蒙の再編成を提起したと考えられる。それはこの二年余りの「文化運動」が多くの成果を残しつつ敗北した自覚に立って、広義の啓蒙・「政治」に知識人・文化

運動を接近させえなかった未成熟に求めたといえよう。

当時から流布された運動の散発的・非自発的性格と特権的・非政治的意識の限界という評価は、この活動には妥当せず逆に知識人・文化運動の独自性探求の課題を宙吊りにする。この特異な「権力の空白期」に生じた実験的な教育運動は状況に強く規定されたとはいえ、「並行して」準備された戦後社会教育行政とは異なる民衆教育思想の萌芽は見られた。社会教育研究においてもその「プレ社会教育」という評価がその限界を共有する限りで、文化運動の「意識革命」の系譜を途絶し制度的・公的保障に吸収させる陥穽を避けがたい。とりわけ中井による「戦後文化運動」総体の（一実践家としての）総括と理論化の作業は、「文化」概念や思想・方法論の面でも（誤謬も含め）継承されなかった遺産が余りに多い。

広島でも社会教育行政や青年団・公民館の確立と並行して自律的文化運動の退潮が進み、教養・娯楽的側面は制度的に保障される一方で批判的意識変革は急速に後退していく。その乗り越えを意図した「共同学習論」等も「知識人啓蒙」批判と共に「意識革命」が後景化し、共同体と自己を批判的に抉り出す試みは閑却され近代化民主化の普及に収斂した。この「プレ社会教育」の切断が民衆運動を公的社会教育の「外部」に押留めた結果、「指導者＝前衛意識」批判と自発性擁護を盾に学習者との対話と批判への踏み込みが阻害されたのである。中井自身が未総括のまま敗北を胸に広島を去り国会図書館という「公的」領域に踏み込み、「意識革命」としての文化運動への途は各人の想いの内にのみ継承されてきた意味は重い⁸⁾。

【中井正一の戦後文化運動関係の主な文書】

- ・「行動の意味」(1946.10『パレット』)
- ・「映画美と世界観」(1946.12『映画芸術』1-5)
- ・「地方文化運動報告—尾道市図書館より」(1946.11『青年文化』2-1)
- ・「芸術における媒介の問題」(1947.2『思想』275)
- ・「地方の青年についての報告」(1947.11『青年文化』2-8)
- ・「農閑期の文化運動」(1948.1『光』4-1)
- ・「意識革命と文化運動——知識の現状を基盤として——」(座談会)(1948.2『光』4-2)
- ・「地方文化の問題」(1948.3『季刊大学』5)

- ・「実践について——馬になった話——」(1948.9『青年文化』3-8)
- ・「知識と政治との遊離」(1948.12『改造』29-12)
- ・「平和のための教育」(座談会)(1949.7『世界』43)
- ・「聴衆0の講演会」(1950.4『朝日評論』5-4)
- ・「大衆の知恵」(1951.9『シナリオ』7-5)
- ・「農村の思想」(1951.10『国民講座I日本の思想』)
- ・「文化のたたかい——芸術と社会教育」(1951.10『社会教育』6-10)

【資料 備後地方における文化・労働運動の概況】

○1946年末—47年設立の文化団体（藤原浩修作成資料より抜粋・『広島県史・通史VII』pp449-450）

- ・福山…福山文化倶楽部、福山女性文化協会若葉会、福山音楽協会、内海音楽連盟、福山美術協会、自治青年大学
- ・尾道…尾道地方文化倶楽部、尾道文化協会、尾道青年文化連盟、尾道英語研究会、尾道美術協会、音楽愛好会あかしあ会
- ・三原…三原短歌会、三原文化協会、三原軽音楽団、三原新派美術協会
- ・御調郡（因島）…土生町新日本民主主義研究会、曙同士会、因島文化連盟、因島新日本民主主義研究会、中国文化連盟因島支部短歌会、羽和泉村文化推進委員会
- ・双三郡（三次）…双三文化連盟、三次音楽連盟、三次町中国文化連盟支部、双三郡書道同好会、巴軽音楽団、巴狭石楠会
- ・その他…府中文化連盟、姫谷会、世羅音楽同好会、遺芳文化クラブ、金江村文化連盟、神辺文化連盟、甲奴愛郷会・音楽同好会、庄原町慈生同志会、敷信村振興連盟

○夏期大学の講師と講義内容例（藤原前掲（1979）p.6・同（1980）p.47より作成、下線は『世界文化』関係者）

- ・「三原文化協会夏季市民大学」(1946年)の場合…「わが国民生活の構造と封建制度」(堀江保蔵)、「資本主義と社会主義」(豊崎稔)、「企業民主化の方向性」(大塚一郎)、「日本貿易の

将来」(藤井茂)、「現代文学の方向」(伊吹武彦)、「新憲法と家族制度」(於保不二雄)、「日本経済の復興と社会政策」(大河内一男)、「戦後の疾病問題」(菊池武彦)、「新美学の課題」(中井正一)

- ・「地御前村夏期労働大学」(1947年)の場合…「民主主義文芸論」(壺井繁治)、「日本資本主義の批判的展開」(青山秀夫)、「現代文芸思潮」(吉田精一)、「人民の歴史」(羽仁五郎)、「日本政治の将来」(中村哲)、「弁証法の新課題」(武谷三男)、「農村恐慌とその対策」(福島要一)、「労農提携と産業復興」(平野義太郎)
- ・「夏期労働大学開催計画」(1948年)・尾道の場合…「古い新しさと新しい美しさ」(中井正一)、「労農運動の歴史的課題」(岸本英太郎)、「世界における人民戦線」(新村猛)、「戦後日本経済の動向」(野々村一雄)

- 1) 佐藤晋一(1992)『中井正一・「図書館」の論理学』pp. 115-153、山寄雅子(2002)『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』所収「敗戦直後の文化運動の興隆と衰亡」pp. 209-232、同(2003)「敗戦直後の広島県における中井正一を中心にした文化・教育運動」(『地方教育史研究』第二十四号) pp. 37-62、藤田・大串(1984)『日本社会教育史』所収・笹川「自己教育運動の復興と展開」p. 199、北田(1986)『大衆文化を超えて』pp. 93-94・pp. 195-196、長浜功(1984)『社会教育の思想と方法』pp. 70-76、豊沢肇(1985)「日本知識人の“戦中”と“戦後”——中井正一の場合」(『史観』第一二二冊・pp.16-30)、木下長広(2002)『増補・中井正一——新しい美学の試み』pp. 188-192、吉田正純(2003)「生活に対する勇氣(前編)——五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における「学習」の位置」(『京大大学生涯教育学・図書館情報学研究』第二号・pp. 31-33)も参照。
- 2) この「戦争肯定」コラムは中井正一「橋頭堡」(『中井正一全集』(以下『全集』)④ pp. 79-112)京都日出新聞1944.9-1945.3掲載・一部無署名)、「雪」(初出1952・『全集』④ p. 56-62)。鶴見俊輔(1981)「戦中から戦後へ」(『全集』④ pp. 357-361)、鈴木正(2001)「転向異説」(鶴見他『転向再論』pp. 73-80)。中井浩(1981)「解題」(『全集』④ pp. 357365-366)、久野収(1981)「解題」(『全集』① pp. 460-461)、小熊英二(2002)『「民主」と「愛国」——戦後日本のナショナリズムと公共性』pp. 175-186、藤田省三(2003)『精神史的考察』所収「戦後の議論の前提」(初出1981) pp. 224-231、岡村敬二(1986)『表現としての図書館』pp. 117-123。
- 3) 中井正一「聴衆0の講演会」(初出1950・『全集』④ pp. 189-196)、同「三木・戸坂両君を憶う」(初出1946・『全集』④ pp. 21-23)、丸山真男(1982)『後衛の位置から』pp. 114-117、池田浩士他編『転向と翼賛の思想史』所収天野「〈戦後〉の転向論のもう一つの源流」pp. 51-58、真下信一(1972)『思想の現代的条件』「思想者とファシズム」pp. 26-37。
- 4) 中井正一「地方文化の問題」(初出1948・『全集』④ pp. 180-188)、北河(2000)『戦後の出発——文化運動・青年団・戦争未亡人』pp. 47-54、池田(1988)「マス・メディア状況の言語表現——〈共考〉の言語はいかにして可能か?」(富山太佳夫編『言語の冒険』所収・pp. 271-276)、赤澤史朗(1995)「戦中・戦後文化論」(『岩波講座日本通史』第19巻所収・pp. 308-324)、広島県(1983)『広島県史・通史VII』pp. 448-456(八木佐一・藤原浩修執筆)、二六会編(1988)『ファシズムと人民戦線の時代の記録』pp. 41-42、山寄雅子前掲(2003) pp. 50-53参照。
- 5) 座談会「平和のための教育」(初出1949・吉野源三郎編(1969)『原点——「戦後」とその問題』所収・pp. 66-95、出席者=猪野謙二・今井誉次郎・上飯坂好実・清水幾太郎・中井正一・新村猛・宮原誠一・司会=吉野源三郎)、中井「文化のたたかい——芸術と社会教育」(初出1951・『全集』④ pp. 128-137)、同「農村の思想」(初出1951・『全集』④ pp. 141-157)、同「地方の青年についての報告」(初出1947・『全集』④ pp. 166-169)、佐藤(1992)前掲 pp. 125-142。
- 6) 中井正一「地方文化運動報告——尾道市図書館より」(初出1946・『全集』④ pp. 170-179)、藤原浩修

吉田：中井正一の戦後活動における「文化」の転形をめぐって

- (1979)「戦後の地域における文化運動——三原文化協会を中心として」(『芸備地方史研究』第123号・pp. 1-12)、同(1980)「戦後広島県の労働文化運動——広島県労働文化協会について」(『広島県史研究』第五号・pp. 41-44)、山代巴(1959)「ある農民運動の組織者——農民運動期の中井正一」(『思想の科学』第9号)、同(1990)「軍国娘の戦争反省のために」(初出1977・同『私の学んだこと』所収 pp. 74-87)、同(1990)「戦後の出発」(初出1982・同『岩でできた列島』所収 pp. 242-257)、藤原覚一(1979)『ある図書館の戦後史』pp. 12-15、占川博(1981)「広島における中井正一」(『全集』④別冊 pp. 12-16)等。
- 7) 中井「農閑期の文化運動」(初出1948・『全集』④ pp. 158-165、思想の科学研究(1976)『共同研究・集団——サークルの戦後思想史』特に大沢「サークルの戦後史」pp. 72-79、H. アーレント(1987)『カント政治哲学の講義』pp. 9-18。
- 8) 鶴見和子(1963)『生活記録運動の中で』、小川利夫編(1980)『講座現代社会教育Ⅰ 現代社会教育の理論』所収小川利夫「占領下社会教育思想における啓蒙の功罪」pp. 231-237、碓井正久編(1980)『講座現代社会教育Ⅱ 日本社会教育発達史』所収大串・笹川「『自己教育・相互変革』の民主主義的展開」pp. 323-344、広島県(1983)『広島県史・通史Ⅶ』(社会教育) pp. 440-447(藤原浩修執筆)。